

<研究ノート>

# フィリピンの高校における日本語教育の実践

鈴木 麻由\*・金久保紀子\*\*

## A Report on Practical Japanese Education on the High Schools of the Philippines'

SUZUKI Mayu \* and KANAKUBO Noriko \*\*

### Abstract

The author visited the Philippines from June 1, 2009 to March 31, 2010 on the JENESYS (Japan-East Asia Network of Exchange for Students and Youths) Programme as a Young Japanese Teacher. This program aims at forging good relations between young Japanese people and their counterparts in other Asian and Oceanic nations. The author took charge of two high schools specializing in science, both of which have a screening examination. The author taught Japanese language and Japanese culture there. This paper aims to provide an overview of practical Japanese education at the high school level in the Philippines.

### 1. はじめに

現在、日本語教育は世界中の国々で行われ、日本語という言語は広く普及している。

鈴木<sup>1)</sup>はフィリピンのマニラに2009年6月から2010年3月まで10ヶ月間、国際交流基金が運営している「JENESYS若手日本語教師派遣プログラム」の日本語教師として滞在し、優秀な生徒が通う中等教育機関2校に通い、日本文化や日本語を教えた。「JENESYS若手日本語教師派遣プログラム」は、日本の若者の派遣を通じてアジアおよび大洋州地域

と日本の連携の土台づくりを目的とする青少年交流事業である。

本稿は、主に鈴木<sup>1)</sup>の経験に基づいて、フィリピンの日本語教育の実践を報告し、フィリピン<sup>2)</sup>の中等教育における事例を示すことを目的とする。

### 2. プログラム紹介

鈴木は国際交流基金が運営する「JENESYS若手日本語教師派遣プログラム」の派遣若手日本語教師として、2009年6月から2010年3

\* ホーチミン市師範大学付属 GHS 南学日本語クラス、G.H.S NANGAKU Japanese school in Ho Chi Minh City University of Pedagogy

\*\* 情報コミュニケーション学部国際交流学科、Tsukuba Gakuin University

月まで10ヶ月間フィリピンに滞在した。

「JENESYS 若手日本語教師派遣プログラム」とは2007年から5年間の予定で日本政府が進める「21世紀東アジア青少年大交流計画 (JENESYS は Japan-East Asia Network of Exchange for Student and Youths): 以後 JENESYS プログラム」<sup>2)</sup> のことである。本プログラムは、アジア、オセアニア地域の高校生や大学生、教師など様々な分野で活躍する人々の日本への招聘や、日本の若者の派遣を通じてアジアおよび大洋州地域と日本の連携の土台づくりを目的とする青少年交流事業である。

### 3. フィリピンの中高等教育における日本語教育

大船他 (2009) によると、フィリピンは英語が公用語であるため、高等教育機関に、日本語を含む他の外国語を学ぶ外国語学部がなく、したがって、日本語専攻課程はいまだに存在していない。中高等教育においても、系統立った外国語教育は行われてこなかった。

しかし、漫画に代表されるようなサブカルチャーの人気の高まりにより、若い世代で日本語への関心は高まり続けており、一部の高校では以前から自主的に日本語の授業を開講してきた。大学や民間財団が運営する一般日本語コースにおいても、夏季休暇中には子ども対象の日本語クラスが開設されており、フィリピンの若い世代においては、潜在的に大きな日本語学習のニーズがあることがうかがえる。

このような状況の中、国際交流基金マニラ日本文化センター (以下 JFM) もマニラ首都圏にて2007年度より試験的に中高等教育機関における日本語教育の導入を試みており、学習者および学校のニーズを受け、2008年度より JENESYS プログラムにて若手日本語教師 (以下 YJT) の派遣を開始した。

鈴木は本プログラムの一環として、現地の

日本語教師と協力して日本語を教えることや、日本文化の紹介などを通じて、現地の青少年に日本に対する関心を深めてもらうため、フィリピンで担当校を中心に業務を行った。フィリピンには2008年に5人、2009年に6人、2010年に5人の YJT が派遣されている。

#### 3. 1 フィリピンの教育制度

次に、フィリピンの学校教育における日本語教育の位置づけについて検討するために、フィリピンの教育制度を整理する。

フィリピンの教育行政は分権化しており、初等・中高等教育は「教育省」、中高等教育以降の職業・技術教育は「技術教育技能開発庁 (TESDA)」、高等教育については大統領府直属の「高等教育委員会 (CHED)」が管轄している。

教育体系は6-4-4制 (6年間の初等教育、4年間の中高等教育、4年間の高等教育) をとっている。初等教育機関 (小学校) は義務教育で、入学年齢は6歳児からである。中高等教育機関は日本の中学校と高等学校を一緒にしたような教育機関である (以下「高校」という)。

授業言語は、国語・社会・保健・音楽など文科系の教科は公用語であるフィリピン語で行われているが、それ以外の理科系教科は英語で行われる。

##### 3. 1. 1 初等教育

初等教育は、1987年の憲法により「義務無償教育」とされ、6歳から12歳までの児童を対象としている。教育省の統計 (2002~2003年) によれば、純就学率は80%程度に達しているが、初等教育を6年で修了するものは60~70%程度である。公的学校の義務教育は6年だが、民間学校の一部では7年、さらに任意の就学前教育も存在している。

### 3. 1. 2 中等教育

就学年限4年の高校に相当し、その選考条件は、初等教育レベルを修了していることである。生徒は12歳で中等教育レベルの学校に入学し、15歳で卒業する。

高校における授業は2003年に通達された“DepED ORDER No. 37, s. 2003”に基づいて実施されている。科目としては、フィリピン語、英語、数学、科学、MAKABAYAN（愛国心を育てるための科目）が設定されており、MAKABAYANの中にAP（社会に相当）、MAPEH（音楽・美術・保健・体育）、EP（道徳に相当）が設定されている。サイエンス高校と呼ばれる、理数系を中心に英才教育を行う特別な高校においては、このガイドラインの規定以上に数学と科学の授業が実施されている。これらの科目以外に選択科目として、ジャーナリズムやコンピューターなど、学校裁量でさまざまな授業やクラブ活動などが実施されている。選択科目については単位の認定はない。

### 3. 1. 3 高等教育

16歳で入学する。

高等教育には、多様な学部・学科があり、大学程度、修士、および博士レベルに分類される。大学生は、通常は4年間の課程を修了

すればよい。しかし、工学、歯学、看護学、（いずれも5年）、獣医学（6年）のように、一部の専攻においては5年以上の課程が求められる。また、医学や法学などの高度専門教育は、終了までに必要とされる時間は、法学で通算8年、医学の場合は9年である。2年または3年の学位取得のない技術・専門課程もある。

教育学関係では、教師が昇進していくためにより高い学位が不可欠である。そのため、現職教員が勤務のかたわら教育大学院で学んでいるケースが多い。その数は大学院在学学生総数の44%にも達する。

### 3. 2 日本語教育の位置づけ

日本語は、各教育機関で自主的に授業が行われてきたが、2008年12月に教育省より高校において選択外国語科目としてスペイン語を導入することが通達され、2009年度になり日本語およびフランス語を試験的に外国語選択科目として、フィリピンの公立高校で実施することを正式に発表した（大船他（2009））。これにより、日本語が高校の一つの選択科目となったが、また確定的ではない。

表1は、教育省から発表された、外国語教育プログラムの概要である。

同時期に、JFMに対して、教育省から教師

表1 外国語教育プログラム概要

(1) 理念	a. 第二外国語における4技能を高め、コミュニケーション能力の基礎を築く。 b. さまざまな世界の就労の場において相互交流ができる人材の育成 c. 異なる人々の文化を理解し、尊重できるようになる
(2) 対象	高校3年生および4年生（すでに英語をマスターしている生徒を対象）
(3) 教科	英語科の選択科目
(4) 時間数	120分/週/ ×40週/年/ ×2年 = 160時間 *ただし、台風や学校行事等での休講の可能性あり
(5) 成績	あり（英語の評価法を援用）
(6) 単位	与えない
(7) 教師資格	教育省が認定する教師トレーニングコースを受講すること 日本語の場合は、JFM 開講の高校日本語教師養成（CJH）の受講者
(8) 試行期間	2年（2009年度、2010年度）

養成等の支援要請があり、2009年4月・5月に現役高校教師（英語科・社会科教師中心）19名を集め、初の教師養成講座を実施した（この教師養成講座を CJH（Course on Japan for High School Instruction）という）。JFM から日本事情・文化を中心としたカリキュラムを提案し、研修を受講した19名は21世紀東アジア青少年大交流計画（JENESYS プログラム）で派遣された4名の若手日本語教師と共に、マニラ首都圏の高校で日本語・日本文化の授業を開始し、11校約1350名の高校生たちが日本語を学び始めた。

その後、鈴木も派遣され、CJH 修了者と連携して日本語教育にあたった。

**表 2 JFM とフィリピン教育省の契約書（抜粋）**

The YJT shall:	
a.	serve for a period of ten (10) months from June 1 2009 to March 31 2010. This period shall include the time required for the YJT to attend the meeting at the Japan Foundation, Manila and to travel, by the shortest convenient means, from Japan to Manila (Philippines) and from Manila to Japan at the completion of the Service (hereinafter defined) under this Agreement. This period can, however, be amended by reason of force majeure, such as war, warlike conditions, strikes, riots, civil disturbances, acts of God, or any other circumstance whatsoever over which the parties have no control.
b.	respect all the laws of the Philippines and rules / policies of the Department and the schools;
c.	conduct classes in Japanese-language for the students preferably together with teachers from the school with fixed teaching hours under the agreement with the Foundation and the schools. The teacher-counterparts will be encouraged to attend the Japanese classes to do team teaching and to eventually sustain the program;
d.	perform services related to activities on Japanese culture and to the general development of Japanese-language education in the Philippines.

実施に当たっては、JFMとフィリピン教育省が表2のような契約書が交わり、最後に派遣先の全ての学校の校長先生がサインしている。

2007年以降の状況を簡単にまとめると以下のようなになる。

2007年11月	日本語キャラバン開始
2008年6月	JENESYS 若手教師による日本語日本文化紹介の試験的導入
2008年12月	教育省通達 “SPECIAL PROGRAM INFOREIGN LANGUAGE”
2009年4-5月	JFMにおいて高校日本語教師養成（CJH）第1回実施 ⇒高校教師19名、教育省3名が受講
2009年6月	教育省より“GUIDELINE”通達。
2009年6月～	YJT 第2期派遣（7月に教育省・国際交流基金間でMOA締結） 高校における試験的日本語授業開始（CJH 修了者およびYJT）
2009年10月	大学で日本語教育に従事するフィリピン人教師とJFM日本語教育専門家「フィリピン中等教育教材作成チーム」を立ち上げ、教材開発に着手。

外国語教育プログラムは、パイロット期間が2年あり、その後、カリキュラムガイドラインおよびパイロット事業の評価を、2009年10月以降、スペイン語から順にモニタリングを実施する計画となっている。

中等教育機関において、日本語を選択外国

語科目として定着させ、軌道にのせていくためには以下の課題への対応が重要であると考える（大船他（2009））。

- （1）教師の育成及び導入・拡大計画（地方展開）
- （2）教材開発
- （3）専門家及び YJT、指導助手の派遣

また、高等教育機関においては、一部の大学において、授業が行われているだけで、日本語専攻は存在しない。

## 4. フィリピンの中高等教育における事例

### 4. 1 学校紹介

鈴木の赴任校、Pasig Science High School（以下パシグ SHS）および Marikina Science High School（以下マリキナ SHS）はフィリピンのマニラ市にある。

この2校は、JENESYS プログラムを利用して、2008年から日本人日本語教師の受け入れが始まった。鈴木はパシグ SHS で一年生29名1クラス、マリキナ SHS で3学年2クラスの計3クラスを担当した。

いずれの学校でも成績上位の生徒が日本語の授業を受けていた。SHSにおいては、能力別クラス編成がなされているが、そのうちの上位クラスだけに日本語の学習が許された背景には、ネイティブの日本語教師が少ない状況下で、効率的に日本語教育を広めたい、また学習者の中から将来の日本語教師を育てたいという思惑があったと考えられる。

以下、各高校の状況である。

#### 1) Pasig Science High School

学校名：パシグサイエンスハイスクール  
（中等教育 / 共学校）

年度の開始：6月（4学期制）

日本語担当の教員：2名

授業名：Japanese [Language & Culture]

日本語の授業の位置づけ：

Social studies- Elective subject  
（社会科の中での選択科目）

授業時間：木曜

（13：00～14：00、14：00～15：00）

金曜（14：00～15：00）

\*前期はCPによる文化紹介が行われ、後期はYJTによる授業が行われる。

#### 2) Marikina Science High School

学校名：マリキナサイエンスハイスクール  
（中等教育 / 共学校）

年度の開始：6月（4学期制）

日本語担当の教員：2名

授業名：Japanese [Language & Culture]

日本語の授業の位置づけ：

Social studies-Elective subject  
（社会科の中での選択科目）

授業時間：月曜、火曜各2時間ずつ

（14：40～15：40、15：40～16：40）

※月曜は日本語担当の教員（以下CP）が日本文化についての授業を行い、火曜はYJTが日本語の授業を行う。

対象学年：3学年上位2クラス

（各クラス40名程度）

2校はいずれも選抜された優秀な生徒が通う学校である。進級する際も、全ての教科で一定の成績が取れなかった場合、退学しなければならない。

### 4. 2 授業内容紹介

授業は、CPであるフィリピン人の教員とYJTとが連携を取りながら進めた。CPの教員は全員CJHでの教案を元に、日本文化紹介を行っている。鈴木は主に、日本語を担当した。

授業ではクラスコントロールも含め、ほぼ一人で行った。鈴木が困っていると、CPの

教員が説明の補助やクラスコントロールなどを行ってくれることもあった。複雑な説明をしなくてはならない際に困ることがあった。クラスをコントロールする際、タガログ語などの現地語の必要性も感じた。このような点からも CP の教員との協働は必要不可欠だと思った。

パシグ SHS、マリキナ SHS、いずれの学校の生徒も週に 1 日限られた時間しか日本語に触れることができない。したがって、積み上げ式の授業ではなく 1 回完結型の授業を心がけ、前回のクラスに関係なく、楽しめるように教案を考えるよう工夫した。指定された教科書もなく、授業時間も非常に少ないため、学習者の要望に応えられるよう、授業の最初の時間にはアンケートを行った。

アンケートの結果、「自分のことを日本語で表現したい」という生徒が多かったため、授業内容を表 3 のように設定した。

生徒は日本語以外の教科が忙しいため、日

本語の授業は楽しめるような内容を望んでいると見受けられる。したがって生徒が体を動かしたり、歌を歌ったり、作品を作ったりするなどの活動を入れるように心がけた。

学校によって担当している学年が異なるせいか、同じアプローチが使えない場合もあった。

テスト期間には、マリキナ SHS とパシグ SHS それぞれのテスト問題を作成した。何をどのような形で答えさせるのか、その問題を答えさせる意味は何か、などを考えて作った。

#### 4. 2. 1 アクティビティ

高校生対象ということもあり、日本語の学習への飽きがないように様々なアクティビティを実施した。

フィリピンの高校生はダンスや歌など、体を動かすことを好む傾向が強いので、反復練習などの単調な活動の際にも、リズムに乗せ

表 3 各校における日本語クラスのスケジュール

	テーマ	内容
1	アンケート	教室用語（「立ってください」等）、挨拶
2	家族	これは誰ですか。これは～です。
3	色	何色が好きですか。～色が好きです。
4	職業	何になりたいですか。～になりたいです。
5	趣味	趣味は何ですか。趣味は～です。そうですか。
6	好き	～が好きですか。いいえ好きじゃありません。
7	予定を尋ねる	～曜日、何をしますか。～をします。 (同じ予定) ○一緒にしましょう。(違う予定) × そうですか。
8	人物描写	～はどんな人ですか。～な人です。
9	正月	日本とフィリピンの共通の料理、干支、年賀状作成
10	忍者	忍者について英語で説明。手裏剣作り。
11	クリスマスの歌	ジングルベルなど。
12	日本の高校生	日本の高校生の日常について。(DVD 鑑賞)
13	トトロ	田舎と都会、どっちが好き？
14	感情	さあ、なるほど、すごい、こわい、おもしろい、やった
15	学校で使える表現	一緒に遊ぼう、一緒に行こう、見せて、あぶない！など。
16	福笑い	～は 日本語 / タガログ語で / 英語で 何ですか。
17	絵描き歌、歌	コックさん、かえるの歌
18	私の町	私は(場所)が大好きです。(場所)は(形容詞)です。
19	日本の広告	新聞の記事から、カタカナを探す。
20	ビデオ撮影	PSHS (MSHS) の生徒に向け、メッセージを送る。
21	まとめプリント	今まで教えた内容を復習



て練習するなどした。アクティビティを豊富に入れることで、授業全体に動きが出るように工夫し、楽しい活動になるよう心がけることで、日本語学習を促進し、動機を高めることが出来た。

以下、実際に行ったアクティビティを紹介する。

#### 1) ビンゴ (クラス全体)

ビンゴは数字やカタカナのチェックをする際に用いた。埋める数字や文字は全員で統一し、始めに生徒にマス目を埋めさせてから、ビンゴを始める。マス目を埋める際、間違えた文字を書いているかなどチェックした。

#### 2) インタビュー

インタビューは、毎回授業の最後に行った。新しい文法は話す練習、聞く練習として必ず行った。インタビューの終わりには必ず生徒に前に出て発表させた。インタビューで使う文型を生徒全員が言えるようになるまで練習した。鈴木も教室内で生徒が日本語を使っているか観察したり、自身が質問に答えたりするなどした。

#### 3) カルタ

カルタはカタカナのチェックに使った。「シ」「ツ」「ン」などの違いに気づかせるためにはよいアクティビティとなった。カルタのルールを知らない生徒が多く、ルールの説明とルールを徹底して守らせることに苦労した。

#### 4) 単語伝言ゲーム

8人くらいでチームを作る。チームで黒板に向かって一列に座り、先頭の生徒に単語が書いてあるカードを見せる。列の最後の生徒は教員に答えを伝える。(何度行っても最初に単語を聞いた生徒が列の最後の生徒に答えをダイレクトに伝えてしまい、うまくいかなかった。) チーム戦を行うと必ず全てのチームで協力してしまう。

#### 5) 体育館で単語探し

様々な仕事の名前を紹介する際、体育館に

あらかじめ単語カードを貼っておき、見つけさせてから導入をした。

#### 6) 体を使った文字練習

大きく腕を動かしたり、お尻を使ったりして文字練習をした。文字を大きく捉えることで、違いに気付く生徒もいた。

### 4. 2. 2 授業以外の活動

マリキナ SHS で、美術や物理などの授業見学を行った。生徒の思わぬ一面を見ることができた。生徒一人ひとりの個性を日本語の授業に活かす方策を考えたいと思った。

また、創立記念日として学校で行われたイベントに参加した。担当クラスでは生徒が日本文化紹介のブースを出し、YJT が持参した浴衣を着て参加していた。

マンガのキャラクターのコスプレを行っている学生もいた。マンガやアニメの影響で、独学で日本語が話せる学生がいて驚いた。

### 4. 3 配属先以外での日本文化紹介活動の実施

YJT が配属先以外での日本語教育現場を視察できる機会を提供することを目的に、YJT が配属されない高校5校において、1時間程度の日本文化紹介を行った。活動はYJT 4名が相談し、分担して実施した。

日本文化だけでなく、日本語学習に興味を



持たせる目的もあった。たとえば、自己紹介を教える際、浴衣を着て、100人近い学生を相手に教えた。普段教えている人数の倍以上ということもあり、学生を引きつけるのに苦労した。

#### 1) 概要

- ・ 使用言語は英語
- ・ 対象は高校生30~100名程度
- ・ 各校の日本文化紹介クラス（1学期間のみ）の中の1コマとして実施

#### 2) 実施校

- ・ Manila Science High School
- ・ Marikina Science High School
- ・ Taguig City Science High School
- ・ Calros L. Albert High School
- ・ Bagon Silang High School

#### 3) 内容

1. 各国での日本語教育の現状について（PPT 利用）
2. 自己紹介「はじめまして。～です。どうぞよろしく」
3. 日本についての○×クイズ
4. 相撲（文化紹介、相撲リーグ）

#### 4) 反応

参加した生徒たちは、始終笑顔で、大きな声で日本語を話していた。実際にスタッフ（約5名）と自己紹介をした際は恥ずかしそうにしながらも、一生懸命自分の名前を伝えようとしていた。

○×クイズは景品が懸っていたこともあり、とても盛り上がった。相撲では、周りの声援が印象的だった。しこを踏む練習では男子学生も女子学生も腰をおとして、大きな声で「どすこい」と言っていた。

#### 5) 効果

日本人に会い、生の日本語を聞くことで、以前よりも日本や日本文化に興味を持ったように思う。また、遠い国の言葉、マンガの中だけの言葉だった日本語を実際に自分が話すことで、より身近に感じてもらえたと思う。

日本語は色々な国で勉強されていると紹介したことは、とても新鮮にとらえられた。日本語は楽しい、日本文化は楽しいと感じる機会となった。

### 4. 4 JFM 図書館業務への協力

JFM では、図書館の来館者（主に、日本語学習者や日本語教師）を対象として、YJT による「おしゃべりコーナー」を実施した。マニラ首都圏に配属される YJT が月に一度ずつ担当した。

#### 1) 目的

- ・ 来館者に、日本語ネイティブと会話する機会等を提供する。
- ・ YJT に、受入機関以外の日本語学習者と交流する機会を提供する。
- ・ YJT が調整員や職員と定期的に面談できるようにする。

#### 2) 概要

YJT が月1回2~3時間程度（YJT の都合に応じて設定）、図書館において来館者の質問に応じたり、一緒に日本語で会話したりするもの。折り紙のワークショップなど、日本文化紹介活動を行ってもよい。

鈴木は12月には書道、1月はカルタ、2月は生け花を担当した。カルタの回では既製のカルタを使って行った後、参加者がカルタの絵札と読み札を実際に作成した。参加者が作成したカルタを使用し遊ぶと、歓声が上がると盛り上がっていた。

### 5. 中等教育における日本語教育・学習上の課題

筆者らの経験および各高校で日本語教師を務める教員からのインタビュー、また各校の生徒達からの声、さらに生徒によるプログラム評価を元に、フィリピンの中教育における日本語教育・学習上の課題を以下にまとめる。



### 5. 1 限られた日本語使用

日本語を学習している生徒たちにとって日本語を教室外で使用することは難しい。日常生活で日本人に接する機会は少なく、日本人とコミュニケーションをするために日本語を学ぶというより、日本に対する憧れのもと、学習している学習者が多かった。

学習者と接する中で、筆者が確認できた生徒の日本語を学習する動機は①将来日本に行きたい、②留学したい、③日本のアニメ、アイドル、④日本の歴史、日本の神話、などに対する興味等だ。特定の事柄や、文化に興味を持つ学習者が多かった。しかし、体系的に日本語を学びたいと口にする学習者も一部いた。

本当の日本語や日本人に触れるのも初めて、という生徒に広く会う機会を作ることも重要であるが、同時に、日本語をさらに深く学びたいという生徒を、高等教育にどのようにつなげたらよいか、は大きな課題である。

また、マリキナ SHS 等の学校では、日本語の学習は科目として位置づけられているものの、他の教科が総合で1.5単位であるのに対し、日本語は総合で1単位として換算されているなど、扱いに差がある。また経過的な措置も多く、学年によって卒業単位に含まれる、含まれないなど差がある。そのため、生徒にも位置づけに混乱が見られ、外国語の学習として不可欠な宿題の位置づけも困難で、限られた日本語使用の環境をさらに狭めている可能性が高い。

### 5. 2 CPの教員との連携

基本的に現場である各学校においては、YJTとCPの教員がチームで教える、という形式をとっていた。しかし、実際にはCPの教員が受講したCJHでの学習内容が終わってしまう、あるいはその範囲を超えてしまうと、CPの教員が日本語授業に対し消極的になる傾向が見受けられた。そもそも日本語の運用レベルがあまり高くないCPの教員が自

信を持って教えられる内容には限界がある。

長くその学校での実績を持つCPの教員であれば、日本語の運用レベルが高くないことを、生徒やその家族、他の教員に知られたくない、という意識も働く可能性がある。短期でやってくるYJTとの連携をどのようにとるかは大きな課題である。

理想的には、お互いにアイデアを出し合いながら授業内容・方法の改善に努めることが必要である。

### 5. 3 アシスタントとしての役割

YJTの任務としては、フィリピン人の教員が日本語授業をする際の補助で、フィリピン人教師のモチベーションを上げることだった。筆者は授業前には授業内容を提案したり、授業中は生徒からの質問に答えたり、日本語の発音を担当したりした。日本の文化を英語で説明するよう、フィリピン人の教員に頼まれることもあった。

マリキナ SHS ではフィリピン人の教員は日本語の授業を行っても給与が払われない。そのため、日本語の授業自体の必要性は理解していても、実際、時間と労力を他の科目と同様に割くことができない状況であった。このような状況の中で、フィリピン人教師のモチベーションが下がらないよう、サポートしていくことは容易ではなかった。自然と、マンパワーとして、鈴木がほぼ一人で行う授業が多くなってしまった。

正規の教員が科目の内容について責任をもつシステムでないと、YJT派遣の目的とはずれが生じてしまい、結果的に生徒の学習に影響が出てしまうのでは、という懸念が残る。

## 6. フィリピンの日本語教育の展望

優秀な生徒が通う高校をターゲットに日本語教育を実施することで、日本語教育を受けた生徒が大学で日本語を学び、日本語教員と

なり指導的立場となり、長い目で見れば日本語の普及に役立つことを目指して、現在JFMを中心にした日本語教育が展開している。

この目論見を成功させるためには、前節で考察した課題を踏まえて、以下の環境の改善を行う必要がある。

まず一つ目は、日本語を学べる機関を増やすことである。マニラを中心に、日本人観光客を目当てに日本語を学びたいというニーズはある。そういう層にも日本語学習の機会をもっと与える必要があるだろう。

次に、日本語を教えることができるフィリピン人教師の養成である。日本人教師が、日本から公的に派遣されるのを待っているだけでは日本語教育機関の増加は見込めない。

同時に、フィリピン大学やアテネオ大学、ダバオの一部の大学など、限られた大学でしか日本語を学ぶことができない現状がある。高等教育機関での日本語教育の充実をはかりつつ、フィリピン人日本語教師を養成することを強く求めたい。

中等教育に関しては、他の科目同様に単位化した科目として、日本語を早く認めてほしい。英語が公用語として使われているフィリピンにおいて、外国語学習の必要性が高くなるという条件があるだろうが、日本語教育の底辺を広げるためにも、まずはきちんとした単位化が望まれる。

フィリピン政府が日本語教育に対しての方針を決められない背景には、日本とフィリピンの経済的・政治的な関係も影響している可能性はある。一方で、EPA（経済連携協定）に基づき、来日し、日本で看護師や介護士として働くことを目指しているフィリピン人も多い。このような状況を考えると、フィリピンにおける日本語教育が衰退することは許されないし、あってはならない。民間レベルの交流に加えて、JENESYS プログラムによる日本語教師の派遣など、地道な活動を続ける以外、効果的な方策はないように思える。

今回のフィリピンでの経験をもとに、YJTができること、YJT 経験者ができることについて、今後も関心を持ち続け、実践していきたい。

注

- 1) 本稿は、鈴木がフィリピンで行ってきた活動を報告することを主な目的としている。状況の考察等は、金久保と共同で行った。
- 2) 外務省のホームページには「平成19年1月に開催された第2回東アジア首脳会議において、安倍元総理より、大規模な青少年交流を通じてアジアの強固な連帯にしっかりとした土台を与えるとの観点から、ASEAN、中国、韓国、インド、豪州、ニュージーランドを中心に、今後5年間、毎年6000人程度の青少年を日本に招く350億円規模の交流計画を実施する旨を発表した。」という記述がある。

具体的には、次のような事業が展開されている。

招へい事業
1. 短期滞在 ● 2週間程度。 ● 日本の政治制度、経済システム、社会・文化等が体感できるような施設や地方都市を視察。 ● 日本の若者・市民との各種交流の場（ホームステイ、キャンプ、学校訪問、合宿、討論会、セミナー、東アジア学生会議等）も実施 2. 中・長期滞在 ● 1・2ヶ月～1年程度。 ● 日本の高校・大学等に留学させ、日本の青少年と共に学ばせる。 ※平成19年度後半以降をめぐり順次予定。
派遣事業
● 将来性が見込める日本人青少年を東アジア諸国へ短期間派遣する。 ● 招へい事業で来日した各国青少年との交流に参加した日本の高校生・大学生等の派遣も想定。 ● その他、日本語教師派遣も想定
交流事業
● 東アジア学生会議、東アジア青年の船事業、東アジア青少年ネットワーク事業等の実施を想定。

**参考文献**

- 大野拓司・寺田勇文（2009）『現代フィリピンを知るための61章【第2版】』明石書店
- 大船千里他2名（2009）「フィリピン中等教育機関における日本語教育導入 調査報告書」国際交流基金マニラ事務所

**参考ホームページ**

- 国際交流基金マニラ事務所：  
<http://www.jfmo.org.ph/index.php>
- 国際交流基金：  
[http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/jenesys\\_yjt/](http://www.jpf.go.jp/j/japanese/dispatch/jenesys_yjt/)
- 外務省：<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/eas/gh.html>